

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム報告書2008～2013年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-15 キーワード (Ja): NDC9:160.4, NDC9:161.3, 宗教, 宗教学. 宗教思想 キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001576

イスラームと向かい合う日本社会

井上 順孝

開催概要

【日時】 2010年10月3日 10時～17時半

【場所】 國學院大學学術メディアセンター常磐松ホール

【パネリスト】

三木英（大阪国際大学）

中西俊裕（日本経済新聞社）

Isam Hamza（エジプト、カイロ大学）

Salih Yucel（オーストラリア、モナッシュ大学）

Gritt Klinkhammer（ドイツ、ブレーメン大学）

【コメンテーター】 師岡カリマ・エルサムニー（慶應大学、獨協大学、アナウンサー）

【司会】 井上順孝（國學院大學）

【プログラム】

10：00－10：10 趣旨説明 井上順孝

10：10－11：00 第1セッション 三木英「モスクが来た街：地域住民のイスラーム『受容』」（日本語）

11：10－12：00 第2セッション Isam Hamza「イスラームは日本の宗教になり得るか」（日本語）

13：00－13：50 第3セッション Salih Yucel “Is Islam part of the problem or solution: An Australian immigrant experience?”（英語）

14：00－14：50 第4セッション Gritt Klinkhammer “Germany - Problems and developments of religious and cultural Integration”（英語）

15：10－16：00 第5セッション 中西俊裕「イスラーム世界との絆——広がる交流のすそ野・産官学を軸に」（日本語）

16：10－17：30 コメントと総合討議
コメンテーター：師岡カリマ・エルサムニー
司会：井上順孝

【趣旨】

21世紀にはいり、日本社会もグローバル化の影響をますます強く受けるようになってきている。宗教という面で見ても、日本で活動する国外からの宗教の数と種類は、増加の一途である。これまで日本社会とはあまり関わりがないと思われてきたような宗教、たとえばヒンドゥー教系の教団、上座仏教系の教団が到来している。韓国からは多くのキリスト教会が日本で布教している。台湾の教団の活動も小規模ながら増えている。

そうしたなかでも、イスラームの影響は、少しずつではあるが、確実に増えてきている。ムスリ

ムが日本社会に占める割合は、西ヨーロッパ諸国などに比べれば、まだはるかに小さいが、それでも小学校、中学校で、クラスに一人二人、ムスリムの子どもたちが在籍するという例が増えてきている。

文化面でのグローバル化もますます進行すると予測される日本社会は、より広範な領域においてイスラームと向かい合うことになると考えられる。そうした認識にたつて、とりわけ宗教文化教育という観点から、日本社会におけるイスラームの問題を考えたい。

「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」による調査・研究は、宗教文化士という資格の設定により、社会的責任を意識しつつ、宗教文化教育を推進していくことを目指している。本フォーラムは、その試みの一環に位置づけられている。

日本人のイスラームについての認識のあり方、日本社会におけるムスリムの現状、そして多様な宗教が共存するようになれば、どのような社会問題が増えてくるのかといった点を中心に、活発な議論を交わしたい。イスラーム圏の研究者、欧米等の研究者を交えて、参加者とともに、この問題についての認識を深める場となることを願っている。

【会議概要】

1. 趣旨説明

井上順孝

最初に司会から趣旨説明がなされた。宗教文化教育を大学の教員・学生を中心に充実させ、宗教文化士という制度を発足させるにあたって、世界の宗教文化についての理解と考察を深める必要があることが強調された。その一環として、今回はイスラーム問題が取り上げられることになったとして、概略次のように趣旨説明がなされた。

ムスリムが世界の人口に占める割合は5分の1から4分の1に近づきつつある。日本ではまだ0.1%以下だが、それでも最近はいろんな形でムスリムに接する機会が増えている。「9.11」以来、日本ではイスラームと聞くと、ともすればテロを連想する人も少なくない。しかし、テロに関わるのはごく一部の人であり、また、ムスリムといっても、その生き方は多様である。マスメディアによって、ニュースとして流されるという側面ではなく、多くのムスリムが送っている一般的な姿を理解するという態度を日本人は養う必要がある。

つまり、宗教文化を理解するということは、テレビや新聞・雑誌等で報道されるような

ニュース的な特別なことだけではなく、生活全般との関わりに注意を向けるということでもある。これまでのイスラームについての日本人の理解は西洋の目を通しての理解という側面が少なくなかった。その意味で偏りも生じている。もう少し全体像を把握する努力をしていかなければならない。

たとえばアメリカ文化であると、良いも悪いもいろんなタイプのものが日本に紹介されている。これに比べるとイスラーム文化の紹介はあまりバランスが取れているとも言えない。ただ、幸いにかどうか、日本ではイスラームフォビア（イスラーム嫌悪）というような傾向は、それほど目立ってはいない。イスラーム人口の少なさが関係しているとは言えるが、最初から偏見を持ってみるという態度は少ないと言える。しかしながら、将来において、もっとイスラーム人口が増えた時に、はたしてどうなるかという問題もある。

これを考えると、今のうちからしっかりと基礎的な知識というものを、より多くの人に持ってもらい、イスラームについてのバランスのとれた、そして適切な理解を養っていく努力をする必要がある。そのためにはとりわけ若い世代の意識形成に大きな影響力を持つ教育に係わる人たちが、どういう心の用意をしておかなけれ

ばならないかが重要になる。今回のフォーラムは、こうしたことを念頭において企画されたものである。

2. 第1セッション 「モスクが来た街：地域住民のイスラーム『受容』」

[発題]

発題者の三木英氏は宗教社会学者であるが、近年は国外から到来した宗教の日本における活動などを調査している。三木氏の発題内容の概要を以下に紹介する。

現在の日本ではモスクが急増している。1990年以前は、日本には4つのモスクがあるだけだった。神戸モスク、東京ジャーミイ、バリインドネシアの礼拝所、そしてアラブ・イスラーム学院の礼拝所である。しかし1990年以降、設置が続き、2009年時点で、北海道から九州まで全国に59のモスクが作られるにいった。

このモスクを日本住民はどう見ているのか、モスクと地元住民の間ではどのようなコミュニケーションがされているのかについて、大阪府にある2つのモスクを対象とした調査を中心にして報告をする。

大阪には大阪モスク（大阪市茨木区豊川）と大阪茨木モスク（大阪市西淀川区）がある。大阪モスクは4階建てである。スリランカ出身の中古車ビジネスに携わっていたムスリムが住んでいた公団住宅の一室が、2000年にモスク（ムサッラー）になった。2005年にやや離れたところにその人が自宅を建て、その2階にモスクとして礼拝所が設けられた。そして今年2010年早々に、この現在地に移転してきた。4階にはイマームのための部屋もある。現在地に移転する前は、金曜礼拝者は多くて30名程度だったが、今は100名を超えるという。パキスタンのムスリムを中心に運営理事会が形成されている。

住民は普通にムスリムの人たちを受け入れているように思われる。むしろ金曜礼拝に訪れるムスリムの人たちの笑顔や礼儀正しさに感心し

ているようである。トラブルめいた話はほぼないと聞いた。去る9月10日には、断食明けのお祭りがあったが、その際もモスク側は近隣に配慮してあまり大きな音をたてないようにした。当地区の町会長にインタビューを行ったが、モスク移転にあたっては事前のあいさつがあり、町会費も払っているとのことであった。また地元の住吉神社の夏のお祭りには祝儀も包んでいる。土曜のイシャーの後には日本人も招いている。しかし概して言うなら、モスクと近隣住民との交流は乏しく、モスクは地域社会の中の飛び地のような感がある。

大阪茨木モスクは2006年に開かれた新しいモスクである。「大阪イスラーム文化センター」(Islamic Cultural Center Osaka)の看板がかかっている。日本では文化センターを名乗るモスクは多いが、モスクという宗教用語の言葉、文字を用いないことで、施設をニュートラルなものとしてアピールし、地域住民に受け入れてもらいたいという思いがあると考えられる。

茨木モスクに集うムスリムは、留学生が非常に多い。モスクから車で10分の距離に大阪大学があり、その学生が多い。このモスクに集うムスリムを主体として大阪ムスリムアソシエーションという組織が作られている。大阪大学ではムスリムのためのお祈りの場所が確保されているようだが、これを大学側と交渉して作ったのがこの組織だと聞いている。金曜礼拝の参加者は25名から40名程度、神戸モスクからイマームを招いている。

茨木モスクは古い家の残る地域にある。徒歩10分のところに、モノレールの駅がある。突然モスクの看板ができたことで、住民は驚いたようである。しかし、予想と違い反発はなく、活発な交流が行われている。土曜の夜に行われる勉強会には頻りに顔を出して談笑する日本人もいる。豊川地区で10月に行われる豊川フェスタにはムスリムの人たちが参加して、チャイやサモサを販売する屋台を出している。モスクから歩いて5分くらいのところあるコリア国際学園

でイスラームの講義をしている。モスク写真展を開催して住民に開放している。

日本でもっとも地域とうまくいっているモスクと話す若いムスリムがいた。なぜそうであるかを考えるとき、第一にはこの地域がインターナショナル地域であることがあげられる。すぐ近くに多くの外国人が研究している大阪大学がある。コリア国際学校も2年前に設立された。JAICA 大阪もそう遠くないところにある。

また地域に人権問題で活動している日本人がいて、その人が差別の問題などに取り組んでいる。コリア国際学園でイスラーム文化のレクチャーを開こうと働きかけるなどした。こうした媒介者の存在が大きい。さらにモスクの近くにムスリムが利用可能な施設があることも重要である。

この2つの例からも言えるが、モスクは依然として飛び地である。地域社会とモスクが平行な状態は当面続いていくだろうと予想する。そしてもし平行ではなくて、両社が交わるということがあれば、その交わりはモスクの外で行われるのがポイントではないか。さらにその媒介者が地域住民とのパイプを持っているということ、交流する具体的な場所を準備できる人であるということがポイントではないかと考える。その媒介者が非ムスリムよりはムスリムの日本人であることが最も望ましいと考える。

[質疑応答]

以上の発題に対し、いくつかの質問があったが、主なものを概説する。

これらの施設が宗教法人として登録されているのかについては、準備中ということであった。言及がなかった茨木モスクにおける町会との関係についての質問があったが、ここでは地域が分裂しているということであった。

さらに地域住民へのインタビューを通して、地域住民のイスラームに対する印象、認識はどのようなものと感じたかについても質問がなされ

た。積極的には行かないけれども、誘われて二、三人が集まったら行くという程度で、一歩引いた感じであるという回答であった。

同一の質問者が、モスクにおけるエスニックなグループのつながり、モスクとそれに関連する施設、そしてモスク側からの地域に対する視線について3つの質問をした。最初の点については、エスニックコミュニティという印象はとくはないという回答であった。二番目の点についてはハラルフードの店といった関連施設はとくはない。交通の便がいいので、他でそうしたものがあるからではないかという見解であった。三番目については、基本的には親しみたいという考えをもっているが、茨木モスクと大阪モスクとでは少し違う。それは茨木モスクは留学生が多いので、いずれ国に帰ってエリートになる。それに対し大阪モスクは大阪でビジネスをしている人が多く、定着志向が強い。後者の方が親しみたいと思っているようだが、現在のところ媒介者がいないということであった。

この回答に対し、ではモスク間で地域との交流のノウハウを共有するなどの関係があるのかという質問がされた。これに対しては関係はほぼないということであった。モスクはそれぞれ独立した存在という感じであるとした。

最後にムスリムの社会層ということが地域住民との関係に関わるかという質問があったが、これに対しても関係はあまりないのではないという回答であった。

3. 第2セッション 「イスラームは日本の宗教になり得るか」

[発題]

ハムザ氏は1978年から1991年まで大阪大学に留学していた経験があり、またその後もたびたび日本を訪れている。日本社会のイスラームに対する見方にも一定の理解をもっている。ハムザ氏の発題内容の概要を以下に紹介する。

日本研究をやっている間に、どうして日本にイスラームが入らなかったのか、その理由を研

究した。日本にまで届かなかった理由はおそらく地理的な問題もあっただろう。しかしもう一つの理由は鎖国政策という政治的なものだと思う。中国の元を作ったのはモンゴル人だが、モンゴル人は12世紀の初めにエジプトまで行ってアラブやイスラーム世界を征服した。彼らはイスラームに改宗して元の思想や文化に影響を与えた。朱子学にもおそらく影響を与えたと考えられる。徳川幕府は朱子学を政治思想として取り入れたが、そこにイスラーム教の影響があるという説もある。

日本がイスラーム世界と接した19世紀の終わりから20世紀の前半まで、ほとんどのイスラーム国は植民地だった。それゆえ日本が近代国家を作っているときあまり魅力を感じなかったと考える。またヨーロッパを通じてイスラームに関する書物などを翻訳すると、あまりイスラームについて悪く言うものも多く、当時の日本ではイスラームのイメージがあまりいいものではなかった。

それでもムスリムとなった日本人がいるが、彼らは明治時代にキリスト教徒になった日本人の人たちと比べると、あまり日本社会に影響を与えなかった。内村鑑三、徳富蘆花、徳富蘇峰、新島襄のような人物がムスリムでは出てこなかった。

20世紀の初め頃、ロシアあるいは中国から、タタール人が祖国の変化、革命などによって日本に入ってきた。彼らは1934年に神戸モスク、また代々木モスクを建設し、日本の財界人からも支援を受けた。しかしイスラーム研究が本格的になされることはなかった。

戦後日本におけるイスラーム研究は1950年代のかなり早い時からまたスタートし、民族学、文化人類学、社会学、歴史学という視点からその地域をとらえると、イスラームという対象が出てきた。ただ専門的な本が多く、イスラームに関する知識は一般的には広まらなかった。

イスラームは他の宗教と違うところがある。それは人間個々人と神とが直接的な関係にある

ことである。私と神の関係は縦の関係であり、横の関係は私と人間社会の関係である。その人間社会との関係をよくするためには、まず縦の関係を強くさせないと私がほかの人間とうまくいかないと考える。

今日本に住んでいる日本人ではないムスリムたちは、留学生、労働者、商売、科学技術を学びに来ている人とかいろいろいる。従って多様な形のイスラームが日本で共存している。古いデータだが、2003年での日本人のムスリムがムスリム教会員だけで800人という数字がある。おそらく今は2,000~3,000人になっているかもしれないが、彼らは自分がマイノリティと自覚している。外国人ムスリムの人数は増加していて、10万人以上だが、日本人ムスリムはマイノリティという認識がある。彼らがムスリムになる理由はいろいろである。イスラーム国で暮らしたり、勉強したりして、ムスリムになって帰ってくる。彼らはそこで見たイスラームが正しいと思って帰ってくる。日本でムスリムになった人の中には、日本社会の中で何らかの不安を感じる、落ち着かないと、そういう動機の人がいる。

はたして日本人ムスリムなりのイスラームができるのか。それには正しい知識が必要だと思う。誤解されたイスラームを考え直し、正しい知識を得て、そして正しい知識を与えるチャンスが必要である。日本には早朝に宗教の時間というラジオ番組がある。もしチャンスがあればその宗教放送で正しいイスラームの知識を与えられればいいと考える。また日本人ムスリムはあまり閉鎖的になるべきではない。隠れムスリムになってはいけぬ。外国から来るムスリムたちは、日本で学ぶと同時に日本型のイスラームを見て、自分のイスラームを見直す必要がある。もしこれが実現すれば、イスラームは日本の宗教になれると考える。

[質疑応答]

ハムザ氏に対する主な質問と回答を示す。日

本人ムスリムに望むことはという質問に対しては、日本社会で孤立しないこと、自分の宗教を隠さないこと、普遍性の部分を日本文化と結びつける必要があること、つまりイスラームを理由として日本人とは違うということを強調する必要はないことの3つをあげた。

人類学者のレヴィ＝ストロースが、日本人というのは私たち西洋人の裏返しのイメージだと言ったことを引用しながら、ムスリムの持っているイスラームというものが日本化されてしまうという懸念はないのかという質問がなされた。これに対し、イスラームは特定の民族のために現れてきた宗教ではなく全人類のための道であるという立場から、共通性そのままイスラームであり、違う部分がそれぞれの多様性であるとした。神がいろんな民族、部族、国民を作った理由は、この人間社会、地球を繁栄させるためだから、お互いに相手の特徴を知るべきである。相手のことを知れば私も新しいものを得る。互いの文化の違いを知ることによって人間の文化が豊かになる、というのがイスラームの基本なので、違った形、日本的イスラームになっても歓迎するとした。

井筒俊彦の研究に関して、これがムスリムの立場から見て、日本でのイスラーム理解を着実に広げているとみるのか、日本的な偏りがあるのかという質問が出された。これに対しては、井筒の研究はレベルが非常に高く、おそらく知識人、大学関係者、あるいはイスラーム文化に関心がある人だけが読んだと思うとし、一般の方にはわかりづらいのではないかと述べた。

ドイツのムスリムの研究と比較しての質問があり、日本におけるムスリムが孤立するという傾向には、例えば言語の問題、サブカルチャーの問題、ムスリムの共同体が関係するかといった問いが出された。これに対して、外国人のムスリムは、ずっと日本に滞在しているわけではなく、いずれ自分の国に帰るが、日本にずっと住んでいるビジネスマンたちは、彼らは望むか望まずにどうしても日本社会に溶け込まなければ

ならないと強調した。日本社会は宗教によっては区別されない。宗教は個人のもので、皆日本人である。ムスリムもそうでなければならない。自分たちは信仰をもっているからと優越感を感じてはいけないという立場であることを述べた。

日本人ムスリムの立場からの問いもあった。日本人ムスリムとして、イスラームの生活を送るとき一番難しいのが、仕事との折り合いであるとした。横の関係のために縦の関係を強化すべきというハムザ氏の考えに対し、縦の人間と神との関係から、一日5回の礼拝をし、断食をし、お酒を飲まないことになるが、これが仕事に係わってくる。そして仕事はむしろ横の関係であるとして、縦の関係を強化すればするほど、横の関係が難しくなってくる、これをどう考えているかという深刻な質問である。

これに対しては、では縦の関係は何のためにあるのかと反問した。神との関係を持ち、断食であったり礼拝であったり、そういうことをすると、精神的なバランスが取れる。そこで平常心で人と接するので、逆に摩擦を起こさない。礼拝、断食によって違いを示すことは、イスラームが認めたものではない。人間としてイスラームに認められるものは、人間社会での関係をよくすることである。同じ職場の人から礼儀正しい人間で、ちゃんと仕事をしているということ、認めてもらえれば、あなたは付き合いが悪いとか、そういうことを言われたいのではないか。酒飲めない日本人はたくさんいる。周りの人は少しずつわかってくれるものである。これはハムザ氏の個人的経験に基づいての回答であった。

最後に、イスラームに対してあまりいいイメージを持たない日本人がいるが、それはメディアや学校教育の影響もあるのではとして、特に学校教育においてイスラームに対して正しい知識を得るにはどうしたらよいと思うかという質問があった。

これに対してはイスラーム世界側からの自己

紹介が下手だとした。布教をしないことがその一つの理由である。自分たちが日本社会でどう見られているかについて知る必要がある。また日本人の側では研究者のグループが、日本の教科書の中でのイスラームの間違った知識とか情報を直そうとしている人たちに期待を表明した。

4. 第3セッション “Is Islam Part of the Problem or Solution: An Australian Immigrant Experience?”

[発題]

日本研究が盛んなオーストラリアのモナシュ大学で、イスラーム研究を専攻している教授サリー・ユセル (Salih Yucel) 氏の発題の概要を以下に紹介する。

オーストラリアにおけるイスラームの歴史の概略と移民政策、さらに「9.11」の前と後で、ムスリムの移民の議論がどう変わったかについてまず述べた。

オーストラリアのムスリムの歴史は、今から200年前にさかのぼる。これはヨーロッパ人の入植以前のことである。中国人あるいはマレー系のムスリムがオーストラリアの北部に到着し、交易に係わった。1860年代になってムスリムたちがオーストラリアに定住し始めた。アフガンのラクダ商人であった。おそらくこの人たちがいなければ、オーストラリア大陸の内陸は開発されなかったのではないか。あるいは遅れたのではないか。

というのも、トラックの登場は1910年以降で、それ以前はラクダ商人がいろいろな物資の供給を行っていた。しかしながら、イスラーム移民は第一次世界大戦後、あるいは第二次世界大戦後になる。数は少なかったが各地から来た。1950年代の国勢調査では2,500人ほどである。出身地は、ボスニア、ロシアなどであった。2006年の調査では、34万人と報告されている。これはオーストラリアの人口の1.7%に当たる。このうち一番大きいのはレバノンからきたグ

ループで、内戦が原因で難民として来た。2番目はトルコ人で、第一次世界大戦の間に強制的に疎開させたという事情がある。以後いろいろな文化的、社会的、言語的問題が起こるようになった。例えば、医者に行ったときに話が通じないとか、言葉の意味を誤解し医師を殴ったということもあった。

オーストラリア政府は1960年代に白豪主義という方針を取っていたが、1974年に労働党の政府により白豪主義は廃止になった。74年から2004年にかけて、多文化主義という政策が実施された。

ところが「9.11」以後、ムスリム移民に対して反対する人たちが出てきた。オーストラリアの価値を受け入れられないのならば、ここにはいられないと言う教育相が出た。国のアイデンティティを脅かすという考えである。

私は1987年にオーストラリアに来たが、イスラームの移民の一人が、95%のムスリムは1人しか妻を持たないのに、ムスリムは皆多妻婚と思っている人もいるという意味のことを話した。またテロリストたちがムスリムの代表者のように思われている。これにはアメリカのネオコン、宗教右派の考えが現れている。とはいえ、オーストラリアでは比較的にリベラルな方針が実施されたと思う。

2006年の国勢調査では、オーストラリアの第二世代、第三世代のムスリムの大学の入学率は13.4%である。これはこの国の平均は7.5%なので約2倍近くになる。

結婚というのもオーストラリア社会との統合との関係があるが、2006年の国勢調査によると、51.9%の第二、第三世代のトルコ系の人々は、自分の民族以外の人と結婚しているということが分かった。31.3%のレバノン人も自分の民族と違う人と結婚しているということが分かった。オーストラリアのムスリムは、他のグループに比べると失業率が2倍になる。初めてやってきた人たちは一番厳しい仕事に就き、さらに出生率が高い。多くの子どもの育てるので妻は

専業主婦にならざるを得ない。オーストラリアでは、ムスリム移民の女性の60%は働いていないということが分かった。

オーストラリアのムスリムは、オーストラリアとイスラム諸国との間の橋渡しをしている。1979年にムスリム特使に任命された人がサダムフセインに会いに行き、捕らえられていたオーストラリア人の釈放を実現させた。

オーストラリアではムスリムにも同じ教育権を与えられている。労働権についてもトルコ系であろうがエジプト系であろうが同じ権利を与えられている。例えば宗教的な問題、社会的な問題であっても、また文化的なもの、ビジネスであっても、自由に組織を作ることができる権利を与えている。

勤勉であるとか、親切であるとか、清潔感を持つとかこういうものはすべての人類に共通するのではと言えるのではないか。人間として、紛争、対立というものを回避していかなければならない。これは武力では解決するものではなく、共通の部分に注目し、それをもとに対話を進めることが重要だと思う。

そうした対話を進めているグループがいくつかある。その一つのオーストラリア異文化協会では、ラマダンの夜のイフタル（イフタとも）という夕食会にイスラーム以外の人たちをよんで対話するというをしている。宗教間対話というのは妥協になるから必要ない、対話しても無駄と考えているグループもあるが、ムスリムが増えるような社会では、それぞれの地域に合った形での交流を進めていくことが大事である。

[質疑応答]

ユセル氏に対する主な質問とそれへの回答を示す。

オーストラリアは多民族国家で、いろんな民族にかなり寛容といわれているが、9.11以来イスラームに対しては目が厳しくなったということだが、新参者はつねに不利な立場にあるので

はないかという主旨の問いがあった。ユセル氏は、これに対し、新参者が不利と言うことはムスリムに限ったことではなく、イタリア人、ギリシャ人がオーストラリアにやってきたときも、最初のころはメインストリームの人たち、宗教グループの人たちから反対があったとした。しかし、第二世代になるとオーストラリアで教育を受け、オーストラリアの社会に自ら入っていくことができたので、自分たちの権利、正義のために戦うことができた。一般的に言って、彼らはオーストラリアに住むことを好んでいる。このことはイスラーム教徒にもあてはまると言える。

母国とのつながりを含め、ムスリムのコミュニティのつながりがどうなっているかの質問もあった。これに対しては、たとえばドイツのムスリムほど強いコミュニティのつながりはないが、第二世代、第三世代となるとムスリム社会のウラマーとのつながりを第一世代よりも強く感じているのではという回答であった。

オーストラリアのムスリムにとっての教育環境についての質問に対しては、オーストラリアのムスリムは、ヨーロッパの人たちよりラッキーだと思うという見解が示された。政府は助成金を出しているし、イスラーム学校がある。イスラームコミュニティが作った私立学校もある。これらの役割は重要で、文化的紛争を作るのではなく、橋渡しの役割をしているとした。

オーストラリアにおけるムスリムと非ムスリムとの異文化交流の現状について、さらに詳しい事例が聞きたいという質問が出た。これについては、オーストラリアにある多くのモスクでは、ほとんどがオープンであり、ラマダン期間中のイフタルには、ムスリムでない人もやってくることで、州政府とか警察など、また知事などが、イフタルを行ったりしていることを紹介した。イフタルは企業、学校などでも行っているとした。

5. 第4セッション “Germany - Problems and Developments of Religious and Cultural Integration”

[発題]

ドイツのプレーメン大学でイスラーム研究を行っているクリンカマー氏の発題の概要を以下に紹介する。なお同氏は現在はルール大学ボーフムに勤務する。

ドイツではキリスト教が最大の宗教だが、2009年現在で、推定430万人くらいのムスリムがいる。これは人口比で大体5.4%である。そのうちの約半数が市民権を得ている。また1万5千人くらいがドイツ人で改宗した人である。出身国別に分けると、トルコ人63%、東ヨーロッパ13%、旧ユーゴスラビア8%。その他アフリカ、東南アジア、中央アジアとなっている。トルコ人がムスリムのグループとしては最大になる。他のヨーロッパ諸国では、かなりのムスリムの人たちが農村地帯に暮らしているが、ドイツではたいていはベルリンなど大都市に暮らしている。

宗派別に分けると、ほとんどがスンニ派で74%を占める。シーア派はイランから来た人が中心で7%くらいだが、とても重要なグループである。

80年代になると、ドイツにきた労働者が宗教を持ち込んだということに関心が持たれるようになった。また1979年のイスラーム革命の影響も大きい。2001年の同時多発テロ以降は社会統合が可能という楽観論は薄れた。多文化共生というのがドイツ人にとってもムスリムにとってもまたドイツ人改宗者にとっても望ましい努力だと思われていたが、これに感情的な議論が混じるようになった。

2つの流れがある。1つは原理主義に対するアプローチである。2番目にそれに対する楽観的な見方がある。2つは二律背反的である国民国家と民族のアイデンティティの問題が関係する。ここに脱民族化して土着化したイスラームが、それまでの統合政策にとって代わる可能性

がある。

2006年以降、ドイツの内務省がイスラーム会議というものを運営している。この会はだいたい40人ほどの常任メンバーで運営されていて、うち20名はムスリムである。イスラーム会議は2009年に、イスラーム教育を学校、大学レベルで確立するという提言を行った。イスラームにはカトリック教会のような組織はない。非常に個人的な宗教である。それを制度化した。モスク協会が民主的な規範を守ると公言し、イスラーム憲章ができた。これは21の項目からなる。そしてイスラームというのは平和の宗教であるというようなことを言った。すなわちドイツの世俗的、民主的憲法に忠誠をしたということになる。

こうした状況でムスリムにとって問題となっていることを述べる。1つは新しいモスクの建設であり、もう1つはムスリム女性のヘッドスカーフの問題である。現在イスラーム協会 (Islamic Association) は2,500くらいに上っている。それらのほとんどは法人化されており、NPOのステータスを与えられていて、非課税対象になっている。ほとんどがトルコの組織や政党とつながりを持っている。この意味においてはこれらのイスラーム団体の少なくとも一部はドイツ社会との統合を目的にしていないのかもしれない。例えばドイツ最大のモスク組織はDITIBであり、トルコ宗教省のドイツ支部である。この組織の長はドイツのトルコ組織の長でもある。公式のステータスを持っていて、数が多いので、ドイツの政府はこの組織に対して、イスラーム教徒の社会統合について相談するということがある

モスクでの宗教教育をドイツ語で行うことについて、トルコのDITIBの長は長年拒否していた。ドイツ語で宗教教育はできないという理由である。

モスクが作られようとしたところにはもちろん反対運動が起こった。例えば2007年にイスラーム教徒がケルンに大きなモスクを作ろうとした

とき、大変近代的なモスクであったが、非常に大きな反対運動が起こった。中がよく見えるような設計になっているが、モスク協会が近隣の人に対して透明であるという風になっているようである。ケルンというところはドイツの都市の中でも人口の12%がムスリム移民で、40近いモスクがある。ほとんどは工場、倉庫であったところを改装したところである。見えないところにあるので彼らは何か隠しているのではないかと偏見を持たれていた。そこでこうした中が見えるようなモスクを造ろうとした。ケルンはカトリックにとって重要な都市であるので、そこにモスクを作ることへの批判が起こったのである。結果的にはモスクは建てられた。

2つ目は女性の問題である。ヨーロッパにおいても、ドイツでもイスラームの服装は社会統合の失敗の印とみられている。2003年には連邦裁判所である女性のイスラーム教徒の講師がスカーフをかぶって公立学校で教えているということが裁判になった。しかし私自身の調査を含めていろいろ調査では、スカーフをかぶることと、イスラームの保守的思想、過激思想とは関係がないということがわかってきている。女性がスカーフをかぶっているからといって、必ずしも古いとだけ言っておれない。スカーフをかぶることによって、男性がいるような社会に出られるというような考えを持っている。すなわち多くの女性がスカーフをかぶりながら、公的、私的な生活において自由を確立することができるということである。

ウエストファリア州においてはこの裁判での問題が発生するずっと前から、イスラーム教徒の女性たちは公立学校で教えていた。統合というのは長い時間がかかるプロセスである。また多面的なプロセスである。1つ言えることは、オフィシャルな統計では相対的に見て第三世代の移民の学校教育がうまくいっていないという割合が高い。特にトルコ系の学校教育がうまくいっていない。これは文化的、宗教的な問題だとしばしば言われる。イスラームがマイナスな

のだと言う人もいる。しかし他にも見えにくい原因がある。ドイツ語を習得することが難しいということ、第一、第二世代の人たちへの教育支援がほとんどないということである。つまり、親の世代が教育支援を受けられない、ドイツ語を覚えられないということが、子供たちにも影響するということである。

第二、第三世代のムスリムはドイツで西洋化している。インターネットの発達によって、新しいものをどんどん取り入れるようになっていく。イスラームの文化が非常に近代的になっている。若いムスリムの人たちは教条的な議論というよりは新しい宗教ネットワークを作ろうとしている。ドイツの中でイスラームがゲットー化するようなことは好まないという考え方を持っている。新しい世代のムスリムたちはドイツ社会において新しい社会統合の形を示すことができるのではないかと考える。

[質疑応答]

クリンカマー氏に対する主な質問とそれへの回答を示す。

ムスリムとしての教育支援のあり方や、社会包摂に対する基本姿勢がどういった状態を志向しているのかについての質問があった。

これに関してトルコ移民が他の移民に対して成績があまりよくないことが述べられ、その原因がイスラームから来るより、言語の問題ではないかとした。ドイツ語を学ぶ機会が少ないことが原因である。また統合に関してはドイツ社会とトルコ移民社会の両方から要請があるので、それに応じたものが作られていくと考える。

またドイツは東西統合という大きな社会的問題を抱えたが、それがトルコ移民の統合の問題に関わりをもったかという主旨の質問が出された。これは非常に大きな問題で、また別のテーマになるということを示唆しながら、ドイツ統合の問題とムスリムの統合の問題は直接は関係ないという見解を示した。

第5セッション 「イスラム世界との絆 ——広がる交流のすそ野・産官学を軸 に」

[発題]

中西俊裕氏の発題の概要を以下に紹介する。中西氏は日本経済新聞国際部の編集委員であり、紙上にイスラーム関係のコラムを執筆したりしている。

中東のバーレーンに赴任して、湾岸戦争中も取材した。その後の湾岸情勢、クエート復興、サウジアラビア情勢イラク情勢などを取材し、95年から4年間はカイロにいて中東和平の問題を取材した。最近では日本と中東のかかわり取材している。その立場から日本政府、日本企業、大学教育の分野で今何が起きているか、どのような点で日本と接点があるのかを分野別に説明した。その概要を示す。

日本ではイスラーム圏との理解を深めていこうという動きが近年活発になっており、2007年に安倍晋三首相がサウジアラビア、UAE（アラブ首長国連邦）、エジプトなどを訪問したが、これが一つのエポックになっているのではないかと考える。このとき行った会社が80社、200人に及ぶ大ミッションであった。

安倍首相の前には小泉純一郎首相が日本政府が主催し、アラブの大使を招いてイフタルの食事会をやるということをした。これはブッシュ大統領が「9.11」のときにやってしまった失敗のリカバリーとして行ったことを参考している。つまりブッシュ大統領は対テロ戦争に関するスピーチのとき、十字軍という言葉を使ってしまうという大変な失敗をした。これをリカバリーするためにイスラーム流の食事会を企画した。小泉首相はこれを採り入れた。そのときは、ムスリムの戒律に違反しないようにハラル料理を集めるのに知識がなくて苦労したということがあった。こうしたことのノウハウを蓄積するということも日本にとって重要になってくるのではないと思う。

2000年代に、特筆すべきことはパレスチナ支

援がある。ヨルダン川西岸にジェリコという町があるが、日本のJAICAが主導してイスラエルを引き込み、隣国のヨルダンも入って、パレスチナ人がここで雇用を創出することができるようにした。ヨルダン川西岸は比較的農産物は富んでいるので、野菜や果物を加工して日本人が技術をつけて、それをヨルダン経由で対外市場に出していくという方法である。

あとイラク戦争後の復興支援でユニークな方策が一つある。これはエジプトが絡んでくる。カイロ大学の医学部にJAICAが日本人医師を派遣して育成してきたという経緯がある。エジプトには日本のノウハウを蓄積したような医師がいるので、彼らがイラクから来た看護師、医師にノウハウを授ける。結果的に日本式のメディケアの情報を与えることになる。日本はノウハウを与えて旅費も出すが、基本的に教えるのは同じ言語のアラブ人同士という三角援助方式をとった。これはJAICAが中南米のほうで行った方式を応用したものである。

企業でも、新しいマーケットとして中東に注目するようになってきている。住友化学に日揮というプラントがあるが、サウジアラビアに100%日本資本の現地法人会社を作ったり、アルジェリアにも同様のプラントを作って石油プラントとかを一手に引き受けたりするという非常に積極性のある事業をしている。

こうした中で文化的なところでアラブ人の顧客、取引先にどう対応していくかを考えなくてはならない。ノウハウがないと、非常にフリクションをおこす可能性がある。企業のほうに宗教文化を植え付けていかないと、せっかく思い切って出て行ったところで結果が出せないということになりかねない。ソフト面、カルチャー面で、企業家の中にも宗教文化を植え付けていかなければならないという段階に来ている。

これまで市場型経済あるいは資本主義がなかなか培われていかなかったが、これは宗教のせいではなかったら何のせいなのかと考えると、第二次大戦後、エジプトなど独立した国はその

後社会主義の国に走っていった。あるいはアラブ社会主義に基づく国営経済に傾いていった。それが最近変わってきたのではないかと思う。そんな中に今日本の企業が出ていこうとしているというのが現状である。

最後に大学教育だが、イスラーム研究に関して日本が近年イニシアチブを取っているのではないかという事例がある。2008年にアジアと中東、欧州、日本など多くの国22か国から人を集めてマレーシアのクアラルンプールで国際会議が開かれた。実はこれは日本とマレーシアの大学の共催で、日本側は複数の大学と機関が入っている。京都大学、東京大学、上智大学、東洋文庫などの研究セクションが集まってリーダーシップを取って、世界中の人とまとめてやった。こういった国際舞台で顔と顔が触れ合うということは非常に大事なことだと考える。

もう1つは早稲田大学の事例で、サウジアラビアを中心に理系、工学系の学生を受け入れるという動きがある。IT関係の研究者などと共同研究を進めてノウハウを伝達し、将来はサウジと日本企業の人材交流とか共同事業を促進していくような機関の役割を果たそうとする研究所ができた。こうしたことはアラブの側も非常に望んでいる。例えばUAEの政府の方針で、現地のアブダビの日本人学校に自分の優秀な子供を預けている。小学生レベルのころから日本でアブダビに赴任している人の子弟と交際させて、現地日本人学校の中学、高校に行つて、大学は日本に来て勉強するというような計画をやっているところもある。

教育に関しては、卒業生をどうするかというところまでは考えていないのが問題である。人と人とのつながりを作ったというだけではなく、そのあとの人間の関係をどうつないでいくかということが重要である。これには政府、企業、大学・研究機関、つまり産・官・学がどううまく連携するかの課題がある。

[質疑応答]

中西俊裕氏に対する主な質問とそれへの回答を示す。

政府や企業が関わった大きな話のほか、たとえばパキスタンやバングラディッシュなどから中古車の販売業に携わる人とかもいる。こうしたことに関して留意すべきことはないかという質問がなされた。

これに対し、2000年代に入って富山のほうでコーランを辱めるような事件が起きたが、そういったイスラームについての理解のなさというものをなくすためには、どんな方法があるかを逆に問いかけた。大学で公開講座の場を開くようなことは有効な手段の一つだが、働いている人にはなかなか参加が難しい。企業と大学のタイアップというようなことが必要ではないかとした。

また、トルコが経済成長していることに関して、これが民主主義と関係するかどうかの質問があった。これについてはトルコは軍の影響もまだ強いので、経済水準がある程度までいくと民主化が起こるというようなことが言えるかどうかまだわからないという回答であった。

6. 総合討議

4つのセッションが終わったあと、師岡カリーマ氏によるコメントがなされ、その後、総合討議がなされた。司会からフォーラムのテーマである「イスラームと向かい合う日本社会」という点に近い質問を優先的に取り上げたいという意向が示された。また師岡氏はエジプト人の父をもち、日本人の母をもつので、そうした立場からのコメントがなされた。

[コメント]

師岡氏は、エジプト人の家庭にムスリムとして生まれ、しかし日本とエジプトで育ち、日本国籍をもって日本で暮らしているという自分の立場の特殊性を明確にしてからコメントを始め

た。そしてこのテーマを設定した人たちと実は問題意識を共有していない。けれども、ムスリムが少数派である社会において市民として存続していくことが困難であるという人々がいるという現状、彼らに対して否定的立場をとる人があるという現状、そういう人がここ数年増えているという現状も意識しているので、その観点からコメンテーターを引き受けたということを予め述べた。以下がコメントの概要である。

デンマークの風刺画事件をきっかけに書いたエッセイがあるが、その中ではムスリムの価値観の説明やムスリムの価値観の尊重の主張、あるいは何をするとムスリムは怒るかといったことを語るのではなくて、人間の品位の問題としてこの問題をとらえるという提起をしたかった。

自分のメンタリティは3分の1がアラブで3分の1が日本で後の3分の1が西洋だと言われるくらいである。そして自分の外見にも触れ、往々にして人は外見に惑わされるということが指摘できる。具体的例として、ある大手の出版社が運営する観光ウェブサイトの東京の名所口コミランキングみたいなものを紹介する。ここに皇居の桜とか、新宿の都庁のパノラマとかと並んで、東京ジャーミーが入っている。代々木上原にあるモスクである。これが何の違和感もなく上位に入っている。

また日本はイスラム世界との対立を今まで経験していない、そしてイスラム世界は一般的に日本に対して良いイメージを持っているという点とともに、もう一つ忘れてはいけないのは、日本人というのは異文化に対して強い好奇心を持っている民族だということである。つまり私が本当はイスラムはこうなんですよと言うと、素直に聞いてくれる。一部の西洋人が抱いているような優越感、不信感、恐怖感などが入り混じった複雑な感情を日本人は抱いていないと思う。

西洋人は近代西洋文明に非常に誇りを持っている。日本やアジアを含め多くの非西洋の国々

が、それを競って、模倣して取り入れていることを多くの西洋人は人類の当然の進歩の流れであるというように受け止めている。ところがイスラム教徒だけがその西洋近代文明に対する羨望とか敬意とかを抱かず、実はそれを拒絶すらしているらしい。実際には世界が西洋に対して抱いている不信感は根本的に政治的なものである。

日本人の場合は事情が異なり、ムスリムが日本で暮らしていくということは楽だと思いません。所謂「9.11」同時多発テロ後に、日本では嫌がらせや暴力の行動の報道はほとんどなかった。これは日本人が無知だったわけではない。ただイスラム世界が遠いという理由は考慮すべきである。イスラム教徒が入ってくるというのは、すごく遠くから来てまた遠くに帰る人が今ここにいて、別にいいというそういう感覚かなと感じる。つまり日本におけるムスリムを考えると、それは西洋におけるムスリムの問題と並べて考えることはできない。むしろコリア系の人々に対する日本人の反応とか、中国系の方々に対する日本人の反応とかといったものと並べて考えるほうがわかりやすい。

モスクがムスリムのたまる場所になってはいけないと思うが、関心を持ったのは、対話のトピックの中に環境が入っていたということである。私の父はかつて代々木東京ジャーミーのモスクのイマームであった。70年代80年代から日本で様々な宗教間の対話を盛んにしていた。こういった対話の席では結局人類皆兄弟で悪い宗教なんてありえませんよというような仲良し会で終わってしまうことが多い。そういった中で、環境のような直接宗教と関係ない、でもすべての人の共通の問題といったトピックが軸になるというのは非常に興味深い工夫だと思う。

人を大きく3種類に分けてみる。1つは異文化に対してとても好奇心が旺盛で、オープンで、どんなにイスラム脅威論が叫ばれようがそれに乗せられないような人々。自分で真実を探しに行くというタイプの人々である。知る機

会があれば喜んで出かけていく。もう1つは正反対で、異文化に対して敵意、軽蔑、無関心を貫く人々。こういう人はもちろん少数派である。大部分の人は3つ目、関心もないけど敵意もないという人々である。この3つ目のカテゴリーにいる人々をいかに1つ目の寛容派の啓蒙派のカテゴリーに取り込むか、あるいは近づけるか、というのが肝要である。

そのためには宗教と関係ないテーマにモスクという場所がどんどん取り組んでいくということが大事である。環境問題に限らず、例えば社会全体が直面している問題、イスラームという宗教にとらわれない知的交流の場にするによって、イスラームに興味がないがそういうことに興味がある人が来る。そこでムスリムに会う、友達を作る、そして帰っていくという場を作ることも実は大切と考える。

そのためにはまずグローバルな、日本をよく知っているムスリムの育成ということをもスリムがして、それを非ムスリムの周りの日本の人々が助けるということができればいいと考える。今は世界的に見て、反イスラーム感情とか誤解とかが危険な度合まで高まってしまった。その責任の一端はムスリムにもある。そうすると何かしなければいけないのはムスリムのほうである。

ムスリムは例えばコーランが焼かれるとか、ムハンマドの漫画が描かれるとか、ムスリムが侮辱されたときは、結束してデモをやったり抗議をしたりして主張する。しかしこのグローバルな時代ではたとえ被害者がムスリムでない時でも、不正がどこかであったらそれに対して声を上げるということをもスリムもしていかなければいけないと思う。ムスリムの女性がヒジャーブをかぶる権利を主張するのもいいが、コンゴで非ムスリムの女性が集団レイプされて、その時に国連の反応が遅いというようなときはムスリムの女性も結束して声を上げなければならない。そうでないと、いつまでたっても、他者としてムスリムを見る、ある特殊なグルー

プとしてムスリムを見るという風潮がなかなか変えられない。

日本のことを語るときに、ムスリムとの融合とか統合という言葉はそもそも出てこない。その次元に至るまでムスリムの数が多くない。留学生、あるいは出稼ぎ労働者として来てまた帰っていく人たちとして、どのようにうまく付き合うかという次元で話されている。問題はこれからである。日本でも私のように両親のどちらかが日本人で自分も日本国籍をもっていて、なおかつムスリムであるという人々を含め様々なバックグラウンドを持った人たちがこれから増えていく。つい最近知ったことだが、実はすでに二世の会というのが結成されているそうである。

日本のニュースで一時期「世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシア」という表現があった。89%がムスリムだから世界最大のムスリム人口だが、89%を占めたらこれは立派なムスリムの国であって、別にインドネシアという国がムスリムを抱えているというわけではない。抱えるという言葉はどうしてもお荷物というニュアンスが含まれる。人口の89%を占める人々がまるでその国の他者であるかのような何気ない言葉の印象の蓄積による人々の認識の形成というのは軽視できないものがある。この考え方でいくと、「イスラームと向かい合う日本社会」という命題も今はいいが、今後は異議を唱えてくる人が出てくると思う。向かい合うという言葉は、他者との境界線の存在が暗示されるし、問題にどう対処するかというものである。だからといってもっといいタイトルがあるかと言われたら私は思いつかない。

これからは、ムスリムが日本社会にけっして他者にならないように、ムスリムだけではなく、多様性そのものが問題ではなく日本の強みになるようにこれから道を探っていかなければならない。日本の場合はそのチャンスと時間がたっぷりある。

[発題者への質問]

以上のコメントに続いて、師岡氏は4人の発題者に次のとおり短く質問した。

三木氏に対しては、大阪の例は大変興味深かったが、すぐ近くの京都では、新しい異文化の象徴のようなモスクが入ってくるということに、人々がどういう反応しているのかを知りたいとした。

ハムザ氏に対しては、国粋主義の日本人がイスラームを脅威とみなされなかったのは、当時の日本の当局の人がイスラームが余りにも遠くて、あまりにも異質だから、これは日本に入り込んできて、日本人の価値観を変えたりするところまで至らないだろうという一種の安心感があったからかもしれないと思うが、どうだろうかと問いかけた。

クリンカンマー氏に対しては、ベール着用の問題に関して、フランスはライシテの原則があるから禁止の根拠は分かるが、キリスト教民主同盟が政権与党であるドイツでは、何が法的根拠になっているのか。

ユセル氏に対しては、オーストラリアではイスラームの高等教育機関への進学が平均の倍であるということだが、このアカデミックな成功の要因はどこにあるかを質問した。

中西氏に対しては、はっきりイスラームと分かるような人たちがこれから日本の企業に就職活動していった場合、それが不利になるということはあるか。そして、ヒジャーブをかぶっている日本人女性が企業に就職活動に行き、ヒジャーブをかぶっているけれども他の子よりも優秀だから採用しようということになるのかを質問した。というのは外国人がヒジャーブをかぶっているのは構わないけれども、日本人がかぶっているのにはいろいろ言われることがあるからとした。

[レスポンス]

師岡氏が個々の発題者に対してなした質問への回答は以下の通りである。

三木氏の回答：京都モスクの代表者はトルコ人である。京都は大学の町であり、留学生も多い。ムスリムは見慣れていると思う。京都と大阪を結ぶ京阪電車の沿線にパナソニックの工場などがあり、研修生が結構いて、京都モスクに訪れる。そして師岡氏がイスラームに関心もないけれども敵意もない日本人にどのようにモスクが対応するかということに関しては、時間のなさ、多忙さが妨げの要因になっているのではないか。

ハムザ氏の回答：戦前の国粋主義などが決してイスラームを知らなかった影響力がないと考えて歓迎したということではない。内村鑑三とか、岡倉天心などは反イスラーム発言をたくさん書いている。もしかして戦略的な作戦があったかもしれないが、やはり危険を感じなかったんではないかと思う。日本人同士ではワンパターンでなければならない。同じ格好をしなければならない。ただ宗教になると、差別はしない。宗教の自由、その宗教の背景には外国の文化があるという好奇心と憧れが含まれている部分もある。

ユセル氏の回答：オーストラリア政府はイスラームの学校に対して各種の資金の援助をしている。そうした援助が支えになっていると考える。それでイスラーム学校の場合も80～85%くらいの方が大学に進学する。

クリンカンマー氏の回答：日本のイスラームの状況はドイツのイスラームの状況と同じように論じられないことは同意する。ドイツがヒジャーブを禁止したのは、先生で、公立学校の場合のみである。私立学校は10%以下で、ほとんどが公立学校である。先生は政治的に中立でなければならないと決められているので、1980年代以降からそういう民族衣装などは着れなくなった。しかし、これには不当な側面があると思う。

中西氏の回答：企業によって変わってくる可能性がある。例えば総合商社であるとういったことを避けて通れない。広報にイスラーム系の方がいる例もある。理解のある会社は偏見な

く採用する。ヒジャブをかぶっていてもその人が優秀であれば採用すると思う。

だんだん差別がないほうに変わっていくと思う。というのは企業の社会的責任というのが問われるし、多くの企業がこれを実践して、社会的なアピールに使おうとしているという時代に入っている。ただ西洋と近くなってしまったときは問題も出てくるかもしれない。

[討議]

最後に自由討議となった。司会がフロアからの質問をいくつか紹介した。一つは進化論に関わるもので、アメリカのキリスト教原理主義などは進化論を学校で教えるなというふうなところもあるが、イスラームの場合進化論の扱いはどうなっているか。

もう一つは表現に関わる問題である。ムハンマドの風刺漫画は品位の問題だということだが、他方で日本の企業は、品位というより、知らないということがある。偶像崇拝をしてはいけないということを知らないなどである。そうすると、知らないが故の問題というのは結構ありうる。その点でどういうところに注意したらよいか。

これに対し、ハムザ氏が、進化論そのものは教えないけれども、進化論についての情報は与えたとした。司会が日本の漫画の「聖☆お兄さん」の例を出しながら、ムハンマド風刺画のような攻撃的なものではなく、基本的にパロディであるような、こうした表現の自由がどの程度認められるかと問うたのに対しては、漫画が一番危ないと答えた。漫画は無意識的に入ってくるので無抵抗で読んでしまい危険だという見解を示した。

進化論については師岡も意見を述べた。もちろんメインストリームのイスラーム教育として進化論はイスラームと相容れない。知識としてダーウィンはこのように考えたが、私たちはこれとは違う考えだという風に教える。ただ、何年か前にイスラーム神学者がコーランを新解釈し

て、進化論をコーランは肯定しているという本を書いた。その本は異端だと大騒ぎになって、発行禁止になった。しかし裁判で結局著者が勝ち、この本が再びエジプトで売られることが許可された。その本では、進化論というのはそんなに私たちの考えと変わらない。基本的に違うのはダーウィンの場合にはそれが偶然進化の道をたどった、私たちは神が望んだ形で進化が起こったものだと書かれている。

司会から「9.11」についての質問がなされた。「9.11」はイスラームを見る目という意味でイスラームにとっては大きなターニングポイントになったが、日本人は学校教育の中で、「9.11」という出来事をどう扱ったらいいだろうかという問題がある。これについての意見を求めた。ハムザ氏は、これはテロ事件として語って欲しいとした。必ずしも宗教がテロを起こしたわけではないということである。ユセル氏も、テロリストがムスリムであるということがあるわけなし、またムスリムがテロリストになるということはないとした。テロは信仰のない人間がすることであるという見解を示した。

締めくくりとして司会から、本日のテーマに対し、師岡氏よりムスリムを他者として想定しているという意見があったことを踏まえ、残念ながら、現実はそのようであり、それゆえに生じているコンフリクトをいかに少なくするかが宗教文化教育の大きな目的の一つであることが述べられた。

付記 なおこのフォーラムの前日に小杉泰氏（京都大学大学院教授）による講演「現代イスラームと日本社会」が行われたが、この講演は本フォーラムの基調講演と位置づけられた。その内容は『國學院大學研究開発推進機構紀要』4号に掲載されているので、本報告書では割愛した。